

令和元年度 横瀬川ダムモニタリング委員会の審議概要について

令和元年度 横瀬川ダムモニタリング委員会を下記のとおり開催しましたので、その審議概要を公表いたします。

記

開催日 令和2年2月7日(金)

会場 中村河川国道事務所 別館2階 第1第2会議室

○目的

横瀬川ダム建設事業による環境への影響検討結果に基づく環境保全措置の具体的手法の実施、モニタリング調査等に関して事業者へ指導・助言を行うことを目的として開催しております。

○審議概要

(1) 水質

- ◆長期間にわたり丁寧に調査をされ、工事中も大きな影響もなく工事が完了している。
- ◆濁水については発生源による組成の違いが明らかになったため、今後の濁水関係調査は必要ないが、将来濁水が発生した時のバックデータとしてほしい。
- ◆貯水池の黒い着色は、今年度調査の結果では原因の特定は難しいが、今後、同様な現象が見られたら詳細な調査を検討するとよい。

(2) 生態系典型性：アユを指標

- ◆アカザが確認されなかったが、餌になる清流生の水生昆虫の減少が理由として考えられないか。水生昆虫の減少理由としてはネオニコチノイド系農薬の影響が考えられるので、アカザの生息環境が水田と関係があれば、ネオニコチノイド系農薬の残留濃度も従来の調査項目に加えた方がより万全ではないかと思う。
 - ⇒ いただいたご意見を参考とし、次年度調査に項目として加えるか専門委員に相談し検討する。
- ◆2021年以降については、ダムと貯水池ができることによって、河川環境に影響が出るとすればどういう影響か、どういう因果関係で最終的に河川環境やアユの生態系に影響してくるかということを専門委員とディスカッションしながら、調査項目と調査頻度を検討されてはどうか。
 - ⇒ 今後の環境予測も踏まえて、専門委員に相談しモニタリング計画を検討する。

(3) 植物の重要種 ・ 移植した植物 ・ 水田表土の移植 ・ 造成湿地

- ◆移植した種の半数程度は残すことができたことは、努力した結果である。
- ◆移植が難しいと考えられた木本類のチシャノキとツゲモチは良好に生育しており、安心した。
- ◆畦畔生のヒメノボタンは、生育個体が徐々に減っているが、幡多地方には点々と自生地が存在するため、地域から全て絶滅してしまうわけではないことから仕方なかったと考える。
- ◆試験湛水前に、水田生重要種と畦畔生重要種の移植が完了し安心した。
- ◆畦畔生のヒメノボタンの移植場所の土壌について、粘土質であるため今後の生育状況を把握し、場合によっては土壌改良するなどの対応が必要。ヒメノボタンは畦畔生のチガヤなどにより守られるものであり、今後は、そのような植生の中に保全対象種が生えることを目標に管理すると良い。
- ◆造成湿地周辺は生き物が非常に少なくカエルの餌になるトンボも少ない。シオカラトンボは来るかも知れないが、その他の種については予測ができない（「このような整備をすればこのような種が入ってくる」といった対応は難しい）ため、入ってきた種が維持されるような管理を行うと良い。
- ◆湿地池の水際が立ちすぎていて陸域と水域の間のファジーな環境（エコトーン）が少なく、生き物が住みづらい環境に見える。また、パイプからの谷の水を引き込んでいるが、水温が低すぎはしないだろうか。良い結果が出なければ、水路を通して水を引くことも検討してみるとよい。ビオトープは2～3年で状態が安定してくる。2か年モニタリング調査を行い、その結果をみながら今後について検討していただきたい。
⇒ 今後のモニタリング結果により検討する。
- ◆ゲンゴロウ等については、昆虫類を生かしながらできる定量的な調査を実施していただきたい。
- ◆昆虫類については、温暖化による影響も懸念される。開花期に飛来する昆虫類の調査も実施してほしい。

(4) 生態系上位性：猛禽類（オオタカを指標）

- ◆オオタカやクマタカは自然環境でも毎年繁殖するとは限らない。オオタカは生態系の頂点に立つものだが、彼らであってもカラスやアオダイショウなどの天敵や気象条件（暴風雨）等により繁殖に失敗することはある。オオタカやクマタカは長生きするため、毎年繁殖すると増えすぎるため、（繁殖の失敗をみると、）生態系はよくできているものだと思う。
- ◆現地視察の際に貯水池でオシドリが確認された。オシドリはオオタカの餌になるため、あらたな狩場が創出されたといえる。
- ◆ミゾゴイが確認されているが、良好な環境を指標する種であるため、次年度調査でも継続的に確認できるとよい。

(5) 動物の重要種：ヤイロチョウ

- ◆当該地周辺（横瀬川の渓谷）は、1937年に日本で初めてヤイロチョウの営巣が確認された場所であり貴重な自然環境である。本年度は鳴き声の確認は少なかったが、鳴き声よりも繁殖することが重要である。巣を見つけるのは大変困難な鳥であり、今年度調査で古巣が見つかったことは評価できる。

(6) モニタリング調査結果の評価と対策

- ◆環境配慮を実施したことがオオタカの繁殖が成功したことの要因と考えている。
- ◆植物については種数の評価では妥当である。
- ◆水田生重要種は、攪乱環境に依存する種であり、その動態は不安定であるため、これらを保全できる場所を造成できたのは評価できる。
- ◆ビオトープについては、モニタリング調査結果を踏まえながら、2-3年経過してミティゲーション（トノサマガエルやアカハライモリ）がうまくいかなかった場合には柔軟に検討いただきたい。

(7) 全般について

- ◆これだけの調査を長期にわたって実施してきたことは貴重な成果であり、誇れるものである。貴重な成果を、アピールするとともに、一般に活用してもらえよう、取り組んでほしい。